



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ドゥッガとヌメディア王権
Author(s)	栗田, 伸子
Citation	東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学, 50: 117-124
Issue Date	1999-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/14151">http://hdl.handle.net/2309/14151</a>
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

## ドゥッガとヌミディア王権\*

栗田伸子

歴史学\*\*

(1998年8月31日受理)

### はじめに

ドゥッガ (Dougga) はチュニス市の西南方約100km余りのチュニジア内陸に位置する集落である。古代ローマ時代にはトゥッガ (Thugga) と表記され、数々の神殿や公共建築、凱旋門、貯水施設<sup>1)</sup>等を備えた一大都市であったので、そのローマ期遺跡としての重要性はトラヤヌス帝のタムガディ (Thamugadi) 市にも劣らない。同時にこの都市はローマ期以前、すなわちカルタゴ時代および古代北アフリカ先住民の王権であるヌミディア王国時代の遺構を含んでいる点で、北アフリカ古代史を連続的に解明する上での貴重な手がかりを提供していると思われる。とりわけ、この地で発見された古代リビア語とポエニ (カルタゴ) 語の二カ国語併記の碑文二点は、リウイウス等のギリシャ・ローマ古典史料において印象的ではあるが半ば神話めいた描かれ方をしているヌミディア王国初期の歴史<sup>2)</sup>についての第一次史料として、極めて重要である。

本稿は、ドゥッガに残されたこれらの考古学史料を利用して、ローマ支配以前の北アフリカ社会、とりわけ先住民王権のあり方を考察するための準備作業の一つである。上記の二カ国語碑文の内容の紹介と検討が中心課題であるが、これらの碑文を考える上で必要と思われるドゥッガ市の歴史についての概観、関連する主要遺構についての知見の整理も行いたい。なお、筆者は考古学については素人であり、また同市を訪れる機会にもいまだ恵まれないので誤りも多々あるかと思われる。読者の御寛恕を請う次第である。

### 1. ドゥッガ市

— 略史および主要遺構 —

エジプトより西の古代北アフリカの先住民を古典史料は、リビア人 (Libyes: 希 この語はカルタゴに隣接する先住民を指す場合と、広くアフリカ人一般を指す場合とがある)、ヌミディア人 (Numidae: 羅)、マウレタニア人 (Mauri: 羅) 等々と区別して呼んでいるが、これらは言語の面では同一の種族に属していたと考えられ、彼らの言語をリビア語 (le libyque) と称する。リビア語は現在のモロッコ、アルジェリア、チュニジア等に分布するいわゆるベルベル諸方言の祖と考えられるため、古代のこの種族をもベルベル人の名で総称する例が多く見られる<sup>3)</sup>。本稿ではリビア語を使用した古代のこの集団を、仮に古代ベルベル人と呼んでおく。

ベルベル先史考古学の第一人者G. Campsによれば、チュニジア・アルジェリア・モロッコの北部一帯のいわゆるベルベリー地方 (La Berbérie) では先史時代に既に各々異なった考古学上の特徴を示す東ベルベリー、中央ベルベリー、西ベルベリーという地域区分が成立していたとされ、このうち東ベルベリー地方の特徴の一つは、シチリア・サルデーニャおよびイタリア半島南部から伝わったと考えられるhaouanet型並びにドルメン型の墓所であるとされる<sup>4)</sup>。ドゥッガはこの東ベルベリー地方に属し、事実ドゥッガ遺跡のある高地の北東端のローマ以前の市壁に隣接して一群のドルメン型の遺構が存在する<sup>5)</sup>。これらのドルメンの厳密な年代測定はなされていないが、様々な時期にわたって複数のドルメンが造られたとみられ、その開始期は北アフリカにおける同型墓一般の建造開始期である前3世

\* Dougga and the Numidian Kingship :Nobuko KURITA (*Department of History*) (Received August 31, 1998)

\*\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

紀にほぼ一致すると考えられる<sup>6)</sup>。ドゥッガのドルメンの墓室のあるものからはカルタゴおよびヌミディアの貨幣が出土しており<sup>7)</sup>、少なくとも前2世紀以前の墓であることはほぼ確かだと思われる。ローマ以前の市壁の方の年代の確定がされていないので、ドゥッガ市の成立とドルメン群との関係を厳密に述べることは難しいが、ディオドルス＝シルクスが前4世紀末のドゥッガと思われる町トカイ (Tocai : 希)<sup>8)</sup> について「大都市」と形容していることが<sup>9)</sup>、カルタゴ・ヌミディア時代のドゥッガ市の成立年代を考える上での参考となる。すなわちドゥッガ市とドルメン群は同時に存在していた可能性が高いのであり、とすれば市壁との位置関係からみてこれらのドルメンは同市と密接な関係をもった、おそらくは同市の有力者の墓所である可能性が高い。この意味でドゥッガ市の住民の少なくとも一部は東ベルベリー人ということになるであろう。

しかしながら、ローマ期以前の他の北アフリカ都市、例えばキルタ (Cirta. 現コンスタンティーヌ市) 等と同様に<sup>10)</sup> ドゥッガ市もまた古代ベルベル人の都市であると同時にカルタゴ文化圏の都市であるという特徴を有する。カルタゴ市がフェニキア都市テュロスからの植民によって建設されたのは伝承上は前9世紀とされ、実際には前8世紀中葉と推定されているが、カルタゴがその市壁の外、アフリカ内陸への支配を開始したのはより後の前5世紀前半、その本格化は前4世紀前半以降と考えられている<sup>11)</sup>。ドゥッガ等のチュニジア内陸都市が、カルタゴの内陸進攻・アフリカ領経営の開始と何らかの形で関連しつつ成立・発展した可能性は高いと言わねばならない。カルタゴが直接勢力下においたアフリカでの領土の範囲に関しては、G. C. Picardの1960年代の研究が定説となっており<sup>12)</sup>、その著書にある地図ではドゥッガは6ないし7つあるカルタゴの行政管区の外、西のいずれに位置するように描かれているが<sup>13)</sup>、他方、最近のS. Lancelによる地図ではドゥッガはカルタゴ領に含まれており<sup>14)</sup>、またドゥッガ遺跡についての本格的な調査報告を書いているC. Poissotもドゥッガを久しくカルタゴに従属していたものと見做している<sup>15)</sup>。いずれにせよドゥッガ市の住民が或る面でカルタゴ化ないしフェニキア化されていたことは、上述のカルタゴ期の貨幣の出土によっても、またローマ期のサトゥルヌス神殿の遺構の下から発見されたパアル神の神域跡<sup>16)</sup> からも明らかである。この神域からはいわゆるnéopuniqueの石碑が出土しており、そこにはタニトの印と通称される人形や、月、太陽、犠牲獣と思われる牡羊・牡牛が描かれている。ただしこの神域はカルタゴの宗教を特徴づけるとされるいわゆるト

フェト (tophet. 通説では幼児犠牲の場とされる聖域<sup>17)</sup>) そのものであるとは見做されていないようである。カルタゴの内陸経営の詳細が明らかになっていない現在、ドゥッガ市とカルタゴの関係、その従属の度合いを正確に述べることはできないが、ドゥッガがアフリカにおけるカルタゴ領の境界的な地域、先住民領へのカルタゴの支配の拡大の先端に近いあたりに位置していたと言うことはできよう。S. Gsellは先のディオドルスの叙述に依りつつ、トカイないしドゥッガを前4世紀末におけるカルタゴ領と先住民 (ノマデス) 領の境界を示す目印と見做しているが、今なお首肯し得る説と思われる<sup>18)</sup>。

このように古代ベルベル社会とカルタゴ・リビュ＝フェニキア人 (カルタゴ化されたりビア人をこのように呼ぶ) 社会の境界域に存在したドゥッガ市は、前3世紀以降のポエニ戦争期における古代ベルベル・ヌミディア王権の勢力伸長の局面においては、逆にベルベル王権側のカルタゴ領への食い込みの橋頭堡となったと思われる。先に述べたようにドゥッガのドルメン型墓所の一つからはヌミディア王国の貨幣が出土しており、この墓が第2次ポエニ戦争期のローマの同盟者でヌミディアの「統一者」であるマシニッサ (Massinissa) によるドゥッガの征服以降のものであることを物語る<sup>19)</sup>。本稿で扱う二カ国語併記の碑文二点は、いずれも大まかに言えば、ドゥッガ市が古代ベルベル・ヌミディア王権側の拠点として整備されていく、この前3世紀以降の時期 (おそらくは前2世紀中葉) に属する。すなわち第一の碑文は、ドゥッガ市のローマ期における市域の南端にある通称アテバン ('Aṭeban) の墓と呼ばれるマウソレウム型の遺構に属するものであり、第二の碑文は同市の中央部にあったと思われるマシニッサに献げられた神殿に関するものである。これらの遺構については次章で詳述する。第3次ポエニ戦争によってカルタゴが滅亡 (前146年) した後も、ドゥッガはローマ領とはならず、ヌミディア王国領にとどまった。ヌミディア時代のドゥッガはおそらく相当繁栄し<sup>20)</sup>、またマシニッサの王朝 (ヌミディアの諸王権の中で、マシニッサの属した王権をマッシュュリー王権と呼ぶ) にとって重要な政治的・宗教的意義を有したであろうことが、このマシニッサ神殿の存在から推定できる。サルスティウスは前2世紀後半のヌミディア (マッシュュリー) 王国に関して、その西部 (マウレタニアに近い方) が人口も土地もより、豊富であるが、東部の方が港や建造物に富むと述べているが<sup>21)</sup>、ドゥッガ市のヌミディア期遺構もこのような東部ヌミディアを特徴づける建造物 (aedificium) の一部であったとみること

ができよう。ただしサルスティウスの『ユグルタ戦争』自体の中にはドゥッガに関する記述は見あたらない。ドゥッガの繁栄はヌミディア王国末期まで続いたらしく、王国がカエサルによって滅亡させられた（前46年）後の前42年、旧王国領に創設された属州アフリカ＝ノウアの総督セクステイウスがドゥッガに居を構えていた可能性が指摘されている<sup>22)</sup>。アフリカ＝ノウア州の首府は普通ザマ（Zama）であったとされるが、ドゥッガもこれに次ぐ地位にあったことがうかがわれる。

ローマ時代のドゥッガについては本稿の主題からはずれるので略述にとどめるが、カルタゴ・ヌミディア時代の旧市街（civitas）の南西にローマ市民の居住するパグス（pagus Thuggensis）が形成され<sup>23)</sup>、このパグスは行政上はローマによって再建されたカルタゴ市に属した。ドゥッガがカルタゴ・ヌミディア時代からの大所領分布地域に隣接し、これらの大所領がローマ皇帝領として受け継がれたことが、ドゥッガの繁栄とローマ化の重要な条件となったと思われる。後に市全体のローマ化の進展にともなって都市の二重性は解消され、205年にドゥッガはムニキピウム（Municipium Thuggense）となり、更に261年にはコロニア（Colonia Licinia Septimia Aurelia Alexandriana Thuggensis）に昇格している。現在ローマ時代の遺構として残っているユノ＝カエレスティス神殿等の神殿群、劇場、中央広場、円形競技場等は、ドゥッガの経済的繁栄とローマ化が顕著となった2世紀から3世紀にかけての建造物である<sup>24)</sup>。しかし3世紀末から4世紀には、ドゥッガ市は既に衰退に向かう。市の繁栄を支えてきた有力家族の没落・減少がその原因とされるが、ローマ帝国全体の政治経済状況の悪化や、北アフリカを舞台としたドナティストの運動もこれに拍車をかけたと思われる<sup>25)</sup>。その後、4世紀末のウァレンティニアヌス1世の下での短い復興の時期を経た後、5世紀のドゥッガはヴァンダル族の侵入の影響もあって何度かの略奪を蒙って荒廃し、人口のかなりの部分を失った。ビザンツ期には放棄された建造物の石材を使用して要塞の建設が行われ、これが古代都市としてのドゥッガでの最後の建造物となった。ただし、この後もドゥッガでの都市生活は完全に死滅したわけではなく、既存の建物を利用した残った住民による生活が、アラブの侵入後も細々ではあるが大きな変化を蒙ることなく続き、古代都市の名を保ったまま近代に到ったと考えられる<sup>26)</sup>。

地理的に言えば、ドゥッガはカルタゴの位置する海岸地帯とヌミディアの大平原の中間にあって、この一帯の中では肥沃な地域であり、年間400ミリ以上の降雨量があるため天水による農耕が可能であって、カルタ

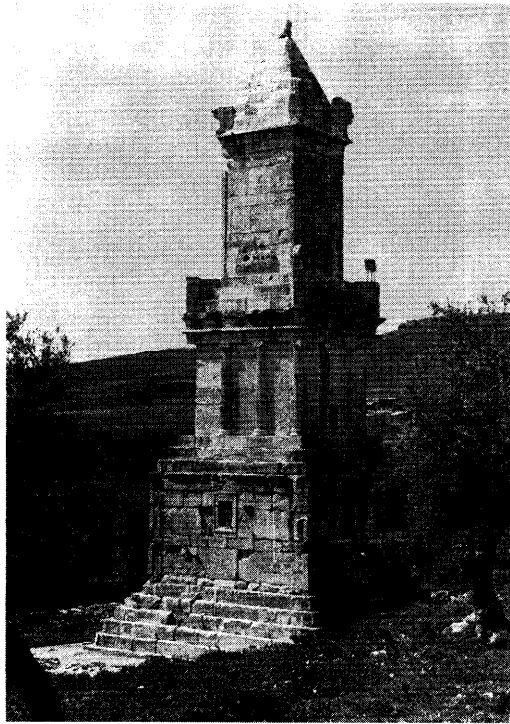
ゴ、ヌミディア、ローマ時代を通して穀倉地帯の一部をなしていたと考えられる<sup>27)</sup>。従って「ヌミディア」からギリシャ語のノマデス（nomades）、英語のnomadを連想し、遊牧的先住民社会を想定する通念はここにはあてはまらない。カルタゴ・ヌミディア時代のドゥッガが、他の先住民都市と比べて際立っている点は、先述の「アテバンの墓」の存在と、リビア語碑文の出土例の多さにある。1941年にリビア語の碑文集成を刊行したJ.-B. Chabotによれば、ドゥッガ付近は、より南のマクトル（Maktar）付近と並ぶ重要なリビア語碑文出土地域である<sup>28)</sup>。Cabotの碑文集成に収められているリビア語碑文は総数1123点であり、うちドゥッガとその周辺地域からのものは18点であるから、数の上で圧倒的とは言えないが、字数の比較的多い大型の碑文が含まれ、とりわけリビア文字解読のきっかけとなった上述のリビア・ポエニツカ国語碑文二点が出土した意義は大きい。普通マシニツサ時代のヌミディア王国の中心地とされるキルタ（現コンスタンティーン）付近がリビア語碑文の出土という点では目立たないのと対照的であり、ヌミディア（マッシュリー）王国時代のドゥッガの性格を考える上で重要と思われる。解読されたりビア文字は形状こそ特異な幾何学的なものであるが、原理的にはポエニ文字と同様セム語式のアルファベットの種類であることが明らかとなっている<sup>29)</sup>。Chabotは22文字からなるリビア・アルファベットとポエニ・アルファベットの対照表を示しているが<sup>30)</sup>、この他にもなお2つの未解読の文字が残っており、リビア語の文法自体はまだまだ不明の点が多いようである。リビア文字はポエニ文字やアラビア文字等と同じように右から左へ横に書かれる場合と、縦書きに下から上へと書かれる場合がある。本稿で紹介する二カ国語碑文は二点とも横書きの例である。

## 2. 「アテバンの墓」とマシニツサ神殿

### — その遺構と二カ国語碑文 —

#### (1) 「アテバンの墓」

有名なハリカルナッソスのマウソレウムを想わせるこの建造物は、ドゥッガ市のローマ時代の市街の南のはずれ（従ってカルタゴ・ヌミディア時代の市街よりはずっと南）にあり、その形状は底面がほぼ正方形で三層の構造を持つ高さ約21mの塔形をなしている〔写真〕。下から第一層目は5段の階段状基台の上であり、第二層目は3段の基台の上であり、第三層目も同様であるがこの層の基台の四隅は騎馬像を載せた台座で固められている。第一層目の四隅はロータスの花の装飾



を持つアイオリス式柱頭付きのつけ柱で飾られ、第二層目はイオニア式柱頭を持つ柱で飾られ更にエジプト式の門型線形がみられる。第三層目は他の二層に比べて細長く、その四隅は第一層と同様のつけ柱で飾られ、また第二層と同様のエジプト式線形がみられる。第三層目の各面第一段目の石組みには、四頭立ての二輪戦車を描いた浅浮彫りがはめ込まれている。この第三層の上に角錐状の尖塔があり、その四隅は海の精の像で飾られている。塔の頂上にはライオンの座像が載せてあるが、これはマウソレウムの周辺から発見されたものを復元時に据え付けたものである<sup>31)</sup>。

問題の二カ国語碑文は塔の東側正面のどこかに揚げられていたとされ、1631年にプロヴァンス生まれの航海者Thomas d'Arcosによってその存在がヨーロッパに紹介された<sup>32)</sup>。このマウソレウムは16世紀末まではほぼ完全な形で立っていたとされるが<sup>33)</sup>、その後何度かの破壊を蒙った。1765年のJ. Bruceによるスケッチでは<sup>34)</sup>、マウソレウムは第二層までは完全であるが、第三層目はかなり崩壊した姿であった。その後、1842年に当時のイギリス領事Thomas Readが二カ国語碑文をイギリスに持ち去った際にマウソレウムは大きな損傷を受け、第二層目も大部分崩壊してしまった<sup>35)</sup>。マウソレウムを現在の形に復元したのは、今世紀初め以来のL. Poinssotらの業績である<sup>36)</sup>。

碑文の本格的解読は1843年にF. de Sauleyによってなされ<sup>37)</sup>、以後数々の研究があるが、現在のところ先述のChabotの研究が広く受け入れられている。以下に

Chabotの『リビア語碑文集成』に収められている(碑文番号1)形に従って、この碑文の①リビア語の部分、②ポエニ語の部分、③リビア文字をラテン文字に転記したもの、を順次示し〔図1〕<sup>38)</sup>、最後に②のポエニ語の部分についてのChabotのラテン語訳を邦訳したものを付す。碑文の形状はリビア語の部分、ポエニ語の部分共に高さ0.7mで、本来はリビア語が右、ポエニ語が左に横に並んでいたものである。横の長さはリビア語の方が0.99m、ポエニ語の方が1.14mである。リビア語・ポエニ語共、横書きに右から左へと書かれており、行数(7行)や各行の長さも両碑文で対応している。Chabotはリビア語が原文、ポエニ語がその訳とみているが、文字の右から左へという流れからみておそらく正しいであろう。なお昨年(1997年)訪英の折に大英博物館に収蔵されているこの碑文を実見した所、リビア語碑文の第四行目右から四文字目の<と、第六行目末尾の文字<は共に左右の向きがChabotの刊本とは逆で<となっていた。<ないし>はラテン文字でいえばiの音を表すとされている。字の向きが逆になる例があることの意味並びにChabotの訂正の意味は筆者にはわからない。リビア語・ポエニ語両碑文とも第一行目の文字が第二行目以下よりやや大きく、また第一行目と第二行目の間が約一行分ほど空いており、第一行目が一種の「表題」的なものであることを推定させる。

〔図1〕

[=  X]=	⋅	⊃	▷	▷	X	≤	=		○	▷	...
O+	≥	π	=	⋅	≥	○	π	[	=	.....	]
=  X=	⋅	⊃	▷	▷	X	≤	=		○	▷	...
											○
											▷
											▷
											▷
											▷
											▷
											▷
											▷
											▷

𐤒𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕  
 𐤒𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕  
 𐤒𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕  
 𐤒𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕  
 𐤒𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕  
 𐤒𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕  
 𐤒𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕𐤓𐤕

- 1 [NTB]N · UIFMṬT · U[FLU]
- 2 [U]DRŠ · UUDŠTR
- 3 [ZMR · UṬ]BN · UIFMṬT · UFLU
- 4 MNGI · UURSKN
- 5 KSLNS · ŽŽI · ṬMN · URSKN
- 6 NBBN · NŠ[Q]RH · MSDL · UNNFSN · NKN · UŠI
- 7 NB<sub>2</sub>N · NZLH · ŠFT · UBLL · FFI · UBBI

[ポエニ語の部分の邦訳]<sup>39)</sup>

- ℓ.1. Palu の息子Iepmaṭathの息子'Aṭebanの記念物 (monumentum).
2. 石の建設者 (aedificatores) は：'Abdašartの息子'Abariš；
3. Paluの息子Iepmaṭathの息子'Aṭebanの息子 Zumar；
4. Varsacanの息子Mangi.
5. そしてその装飾における職人は (或いは、「彼らの協力者は」)：ZizaiとṬamanとVarsacan.
6. 木の職人は：Nanfasanの息子Masdalと'Ašaiの息子Anakan.
7. 鉄の注入者は：Bilelの息子ŠafoṭとBabaiの息子 Paphai.

このマウソレウムが「アテバンの墓」と称されるのは第一行目の記述による。ただしリビア語の部分の第一行目は4～6字分欠けており、ポエニ語の方の第一行目も2字分ほど欠けている。従ってこの訳にはかなりの推定が含まれている。第二～四行目は「石の建設者」として三人の人名を挙げているが、このうち二人目は明らかに第一行目のアテバンの息子である。Gsellはこの三人について、一人目はこの建造物の建築家であって、これは名前からみてカルタゴ系であり、二人目はこの建造物によって記念されている当人 (アテバン) の息子であってリビア系であり、三人目もリビア系であると考え、このリビア系の二人は建築・設計自体というより、別の何らかの仕方 で建設にかかわった人物、例えば出資者と監督者ではないかとみている<sup>40)</sup>。すなわち、このマウソレウムはリビア系 (古代ベルベル系) の施主がカルタゴ系の建築家に依頼して健立したものであるとの推定であり、先住民有力者の文化面での外来文化への依存性・混血性を示すものとの評価である。しかし最近F. Rakobらによって紹介されている説では<sup>41)</sup>、第一行目のアテバンは被記念者・被葬者ではなくてリビア系の建築家であり、つまりこの碑文は建造物の建築家とその技術者一同の陣容を示したものであって、施主や被記念者 (マウソレウムの主) については何も語っていないとされる。これらの説では、このマウソレウムと次に紹介するマシニッサ神殿の年代がほぼ同時代と考えられていることに着目しつつ、このマウソレウムをヌミディア王マシニッサ自身の cenotaph (空の墓) とする例もあるようである。この説の当否を明らかにするためにはポエニ語のテキストの精読や、ヌミディア各地の王権に関係すると思われる建造物全体の総合的検討が必要であり、いずれも筆

者の手に余るが、もし当たっているとすれば、ドゥッガ市とヌミディア (マッシュェリー) 王権の関係は従来考えられて来た以上に密接であることになる。

(2) マシニッサ神殿

この神殿の存在はその建設について記された以下に紹介する二カ国語碑文によって知られる。神殿自体は現存しない。ローマ時代のドゥッガ市の中央南西寄りにあるビザンツ期の砦の城壁にはめ込まれた形でいくつかのポエニ期建築の破片が発見されており、それらの中にロータスの花の装飾付きの隅のつけ柱、エジプト式の線形、イオニア式の柱頭という、(1)のマウソレウムの各部と類似したものがみられるため、これが二カ国語碑文のいうマシニッサ神殿ではないかと推測されている<sup>42)</sup>。神殿の所在地はローマ時代のフォルムの北側と考えられている。碑文は1904年にM. Sadouxによって発見され、現在バルド博物館に収蔵されている。横幅0.68m、高さ0.33m、厚さ0.25mで、まず上部にポエニ語が5行、次にリビア語が7行書かれ、リビア語の七行目 (全体の十二行目) の後半は再びポエニ語となっている<sup>43)</sup>。以下にChabotが挙げる形 (碑文番号2) で、①ポエニ語およびリビア語のテキスト、②リビア語のラテン文字表記、の順に示し [図2]<sup>44)</sup>、並びに、ポエニ語の部分についてのChabotのフランス語訳を邦訳したものを示す。ちなみにリビア語第一行目によりドゥッガの原綴がTBGGであることが判明する。

[ポエニ語の部分の邦訳]<sup>45)</sup>

- ℓ.1. ドゥッガの市民達がこの神殿をスフェス (役職名) Zilalsanの息子である王Gaiaの息子マシニッサMassinissaのために建てた。[王]
2. Micipsaの第10年に。—— 王Afšanの息子である王Šafoṭの年。百人会の長 (であったのは)：[Šanakの息子] Banaiの息子Šanakと、Tanakwaの息子Ganam (Magon?) の息子Šafoṭ。
3. mšškwi (であったのは)：Sadylanの息子Iaristanの息子Magon。gzbi (であったのは)：王'Abdešmunの息子で百人会の長Šafoṭの息子Magon。
4. gldgiml (であったのは)：'Abdešmunの息子であるMasnafの息子Zumar。五十人の長 (であったのは)：王Magonの息子である王'Ašyanの息子Maquelo。
5. この仕事に任じられたのは：Patašの息子



(マッシュリー) 王権の「王」を示す語とが同じであるという点にとどまるように思われ、GLD(「王」)職の就任資格がfamiliaの長たちに限られていることや、GLDが近現代のaguellidと同様に部族制的構造の上に立脚した族長職なものであることまではただちには論証し難いように思われる<sup>51)</sup>。むしろ百人会の存在など、ドゥッガの政体とカルタゴの政体との比較、或いは他のリビュ＝フェニキア人の都市のあり方との比較が必要だと考えられるが、その作業はまた別稿に譲りたい。

### おわりに

以上で述べてきたように、ドゥッガ市は地理的にはヌミディア(マッシュリー)王国の東端、カルタゴ領との境界域に位置し、王国の首都キルタからは隔たっているにもかかわらず、マッシュリー王権、特に王マシニッサ本人と相当深いかかわりがあったらしいことがうかがえる。同時に、前2世紀後半において、ドゥッガ市が王権から一応区別される自治的組織(ドゥッガ市なりの「王」制)を有していたことも、第二碑文から推定できる。この碑文を手がかりとしてヌミディアの国制・社会を考えてゆく上では、マッシュリー王権の構造とドゥッガ市の「王」制の構造の間に共通点を見出して、ドゥッガ市のような組織の内部からヌミディア全体をカバーするような王権も出現してゆくという風にもみるのか、逆にドゥッガ市を古代ベルベル社会にくい込んだカルタゴ的「異物」とみて、マッシュリー王権が自らにとっては外的なものである自治的都市ドゥッガを支配するためにとった手段として上述のマシニッサ神殿建立等を理解するのが、考察の分岐点となると思われる。第一碑文と「アテバンの墓」の遺構の問題も難解であり、従来説のようにこれを有力者アテバンの記念建造物とみるのなら、王墓的規模を有するこのような建物を建立し得た「アテバン王朝」をヌミディア諸王権の系譜の中にどう位置づけるのが問題とならざるを得ない。新説のようにこれをマシニッサ自身の記念物とみるのであれば、ヌミディア(マッシュリー)王国におけるドゥッガの地位は普通首都とされるキルタ以上に中心的であることにもなり、マッシュリー王権形成史全体の見直しが必要となろう。本稿はこれらについて判断を下すには至らなかったが、古代ベルベル社会において一般に都市とは何か、王権と都市とはどのように接合されているのか等を古典史料を整理して考えていくことによって、今後これらの問題に答えたいと思っている。ヌミディア王権を「アテバンの墓」の外見が示すような一種のヘレ

ニズムの現象として理解し得るのかどうか、その際一つのポイントとなるであろう。

### 注

- 1) いわゆるciterneと呼ばれる貯水槽。
- 2) ローマ人の側から見た第二次ポエニ戦争期のヌミディアおよび王マシニッサ像に関しては、拙稿「〈敵〉のイメージ——もう一つのポエニ戦争」吉村忠典編『ローマ人の戦争』講談社、1985年、pp.45-90等参照。
- 3) G. Camps, *Berbères. Aux marges de l'Histoire*. Toulouse, 1980, M. Brett & E. Fentress, *The Berbers*, Oxford, 1996 等。ベルベル諸方言は広くはアフロ＝アジア諸語に含まれる。Fentress, p. 14.
- 4) Camps, p. 78 : haouanet型墓所の写真は同書p. 74, ドルメンの写真はp. 79にみられる。
- 5) C. Poinsot, *Les ruines de Dougga*, Tunis, 1958, p. 68, Pl. xxi, S. Gsell, *Histoire ancienne de l'Afrique du Nord*, II, Paris, 1921-1928, repr. Osnabrück, 1972, p. 110, n. 10
- 6) Poinsot, p. 68.
- 7) *ibid.* 墓所からはこの他に骨、遺骨壺、イタリア陶器の断片等が発見されている。
- 8) Gsell, II, p. 95.
- 9) Diod. XX. 57. 4.
- 10) 例えばコンスタンティヌ市のEI-Hofra遺跡からはポエニ語で書かれたバアル＝ハモン神、タニト女神への奉獻石碑が多数出土している。H. G. Horn & C. B. Rüger (eds.), *Die Numider. Reiter und Könige nördlich der Sahara*, Bonn, 1979, pp. 548-570.
- 11) 拙稿「アフリカの古代都市——カルタゴ」『岩波講座世界歴史 4 地中海世界と古典文明』岩波書店、1998年、p. 152。
- 12) G. C. Picard, "L'administration territoriale de Carthage," in : *Mélanges d'archéologie et d'histoire offerts à André Piganiol*, Paris. 1966, pp. 1257-1265.
- 13) G. C. Picard & C. Picard, tr. by D. Collon, *The Life and Death of Carthage*, London, 1968の見開きの地図等。
- 14) S. Lancel, *Carthage*, Paris, 1992, p. 281.
- 15) Poinsot, p. 9.
- 16) *ibid.*, pp. 9, 65-66.
- 17) しかしこの通説に対しては異説もある。佐藤育子「カルタゴにおける幼児犠牲——その現状と課題をめぐって」『史艸』35, 1994年, pp.246-263参照。
- 18) Gsell, II, p. 101.
- 19) Gsell, II, p. 110, n. 10, V, p. 263, n. 8. ただしドゥッガが



- どの時点でマシニッサのものとなったのかについては Gsellらが根拠としているアッピアノス (*Lib.* 68-69) の解釈について異説があり、確定し難い。G. C. Picard, *L'administration*..., を参照せよ。
- 20) Gsell, V, pp. 263-4
- 21) Sall, *Jug.* XVI. 5.
- 22) Gsell, VIII, p. 166, n. 2.
- 23) Poinsot, p. 10.
- 24) *ibid.*, pp. 12-13.
- 25) *ibid.*, pp. 14.
- 26) *ibid.*
- 27) 村川堅太郎『羅馬大土地所有制』日本評論社, 1949年, の分析対象となっているアフリカのローマ皇帝領・大所領の分布地域もドゥッガに近接している。
- 28) J.-B. Chabot, *Recueil des inscriptions libyques (R. I. L.)*, Paris, 1940-41, p. 1.
- 29) 詳しくはChabotの前書きを参照せよ。最近の文献として, O.Rössler, „Die Numider. Herkunft-Schrift-Sprache“, in : H. G. Horn & C. B. Rüger (eds.), *Die Numider*, pp. 89-97.
- 30) Chabot, *R. I. L.*, V.
- 31) 以上の「アテバンの墓」の形状についての叙述全体は Poinsot, pp.58-59による。Poinsotはこの遺構をMausolée libyco-puniqueと呼んでいる。このマウソレウムは現在ほぼ完全な形で見ることが出来るカルタゴの技術を伝える建築としてほとんど唯一のものであるため, ヌミディア王権関係の建造物としての意義以上に, カルタゴ文化についての資料として注目されることが多い。建築様式としてはヘレニズム的要素とオリエンタ的なものとの混合というべきであろう。Gsell, VI, p. 86. ただし, この建造物が小アジアのマウソレウムと同じ宗教上の機能を持つものなのかどうか, 墓なのか記念碑なのかいわゆるcenotaphなのか等は不明である。ヌミディアにはこのドゥッガのマウソレウムの他にも, コンスタンティヌ市の南のEI Khroub, Medracen,より西の海岸の Siga,Tipasa,東のSabratha (現在のリビアにある)等に王権にかかわると思われる建造物が分布している。F. Rakob, „Numidische Königarchitektur in Nordafrika,“ in : Horn & Rüger (eds.), *Die Numider*, pp. 119-171. J. Fedak, *Monumental Tombs of the Hellenistic Age : A Study of Selected Tombs from the Pre-classical to the Early Imperial Era*, Toronto・Buffalo・London,1990,pp.133-140.
- 32) Poinsot, p. 17.
- 33) *ibid.*, p. 59.
- 34) *ibid.*, p. 60.
- 35) *ibid.*, p. 59のPl. XVI I のaが復元前の写真である。
- 36) Lancel, p. 328.
- 37) Chabot, *R. I. L.* p. 2. F. de Sauley, “Lettre sur l’inscription bilingue de Thugga,” *Journ. asiat.*, 1843, I, pp. 85-126 (筆者未見)。
- 38) Chabot, *R. I. L.*, 1の碑文 (pp. 1-3)。以下の碑文の形状についてのデータもChabotによる。
- 39) この碑文の現代語訳としては Horn & Rüger (eds.), *Die Numider*, pp. 576-7 にドイツ語訳がある。碑文の写真もここにみられる。
- 40) Gsell, VI, pp. 86-87.
- 41) Rakob, p. 158, n. 69, Fedak, p. 225, n. 150
- 42) Poinsot, pp. 40-41.
- 43) Chabot, *R. I. L.*, p. 3.
- 44) Chabot, *R. I. L.*, 2の碑文 (pp. 3-4)。
- 45) この碑文の現代語訳としてはChabot以外にFentress, p.39がある。ただし第一行目のZilalsanをZilasanとしたり, 第十二行目を第六行目であるかのように表記するなど, やや不正確である。
- 46) Camps, p. 95はこの碑文等をもとにしてマッシュリー(ヌミディア)王家の系図を作成している。
- 47) これらはポエニ語ではmamleketと表記されている。Gsell, V, p. 127, n. 5, p. 133.
- 48) Gsell, V, p. 133.
- 49) Fentress, pp. 288-9, n. 57.
- 50) *ibid.*, pp. 39-40.
- 51) この碑文のGLD (guellid) の語が後のベルベル諸方言のaguellidにつながっていることはFentressの指摘以前に既にGsell, V, p.127 が述べている。ただGsellはaguellidがイブン=ハルドゥーンによってスルタンとほぼ同義とされていることを紹介し, またポエニ語のmelek, mamleket, ギリシャ語のbasileus, ラテン語のrex, regulusとの関係を検討するなど, より慎重である。

写真はS. Lancel, Charthage, Paris, 1992, p. 330による。

図1, 図2, は共にChabotの本文中のテキストをそのまま掲載したものである。